

# 日英語の音韻表現の違い

33期生

## I はじめに

中学1年生から始まった英語の学習も、はや2年半になる。今までは日本語だけだったが、英語の文章にも接するようになり、また、英語の歌にもより一層親しみを持つようになった。このように、私達は毎日異なった2つの言語に接触しているわけだが、それぞれにそれぞれの表現技法があるのに気が付く。その中でも身近な物として、歌詞や諺、標語などによく使われている表現方法——英語では頭脚韻効果、日本語では七五調——について、英語・日本語のどういふ点を生かした表現方法であるか、及び、これらがどういふ効果を生んでいるか、ということ調べてみた。そして、この逆、すなわち日本語で韻を踏むことや英語で七五調のように音数によってリズム感を出すことが、なぜあまり使われていないのかを考察してみた。

## II 本論

まず、下の3つの歌詞を読んでもらいたい。おそらくほとんどの人が知っているはずである。

1. Twinkle twinkle little star — ①  
How I wonder what you are — ②  
Up above the world so high — ③  
Like a diamond in the sky — ④

- |                  |                            |
|------------------|----------------------------|
| 2. もしもしかめよ／かめさんよ | 3. Let it be let it be — ① |
| せかいのうちで／おまえほど    | Let it be let it be — ②    |
| あゆみののろい／ものはない    | Wisper words of wisdom — ③ |
| どうしてそんなに／のろいのか   | Let it be — ④              |

1・2は童謡であり、大変なじみ深い。誰にとってもなじみ深く覚えやすい一因は、これらが簡単だからである。しかし、ただ簡単だというだけではない。簡単な中にいろいろな技巧が凝らされ、1つの詩となっているのである。こういった工夫が、上のような歌を私達に気軽に口ずさませる。その工夫の1つが1.では韻であり、2.では七五調である。

### (1) 頭脚韻

1.で、どのように韻が踏まれているのかをみよ。

- ① — Twinkle-twinkle (繰り返し)
- ② — How-wouder-what ((W))

- ③ — Úp-ábóve ((Λ)と〔ə〕の擬似頭韻)
- ④ — Like-díamoud ((ai))
- ①と② — star-are ((a:))
- ③と④ — high-sky ((ai))

たった4行の中に6ヶ所も韻が踏んである。もう一度この詩を音読してみれば分かるが、このように正確に韻が踏まれていれば、音読した調子が大変よい。また、韻を踏んでいる語自体が強く印象に残る。(この場合、特に脚韻の star と are, high と sky がそうだろう。)これから分かることは、韻の効果は英語の中で大変重要な役割りを果たしているということである。次の例を読めば、それが一層よく分かるだろう。

3. Haste makes waste. — [eist]
4. Birds of a feather flock together — [ər]と[əðər]

3・4共に諺であるが、諺というものは、日本語のものを考えても、とても覚えやすく印象深いものである。上の2つはこのような特徴を作るために韻が利用されているのである。

韻の目的についてこれまで述べてきたが、次に、英語そのものの持つ性質と照らし合わせてみたい。韻といっても特に日本語にあまりなじみのないのは脚韻である。1.では①と②、③と④で脚韻が踏んであるが、脚韻と大きく関係するものの1つは語順である。主語—述語—目的語と語順が決まっています、教科書などではS+V+Oの文型とか、S+V+O+Cの文型と書かれてある英語の文章は、一見語順に関して正しい規則性があるようだが、文末においては全く違う。

例 文	文末に来る語の品詞
I go to school.	名 詞
I want to buy it.	代名詞
Let's go home.	副 詞
Flowers make me happy.	形容詞
What's your motto to live by?	前置詞
I have many things to do.	動 詞
There're two dolls that I made.	動 詞(不規則・過去形)
I've already done.	動 詞(不規則・過去分詞形)
What are you holding?	動 詞(現在分詞形)
Do it as soon as you can.	助動詞

文末に持ってくることでできる品詞は最底十種類、つまり平叙文であっても、基本的な単語はほとんどすべて文末にくることが可能なのである。言い換えると、英語では文末の単語を、ほとんど全ての語彙の中から選べるのであり、良く似た響きのもの、共通音のあるものを使えば、それでも脚韻が踏めたことになるのである。

また、日本語には、「木」「手」「蚊」「目」「字」「子」など1音節のみの単語が多いが、英語には'a' 'me' 'she' 'he' ぐらいしかない。このことから、英単語は日本語の単語より長いのではないかと考えられる。1つ1つの単語がある程度の長さを持つと、当然よく似たものや

共通音のあるものが増える。しかし、1音節・2音節しかなければ全く異なったものが多い。英語に少数音数の単語が少ないことも、韻を踏み易くしている一因であるといえるようである。

では頭韻はどうだろう。下の2つの諺は頭韻を踏んでいる。1・3の詩も参考にできる。

6. Love me little, love me long. — ([l])

7. The early bird catches the worm. — ([ɑ:r])

1の②④や3での③、上の6・7のように文中の単語の中ではほぼ同じ位置にある音をそろえれば、たとえそれが6の[l]のような弱音でも十分頭韻としての効果はある。頭韻は全ての単語がその材料となり得るので、母音・子音共に音節数の多い英語ではその分レパートリーが広いことになり、踏み易くなる。それともう一つはすでに述べた、少数音数の単語が少ないということである。

以上、英語での韻について述べた。次に日本語の特色、七五調についてみていく。

## (2) 七五調

私たちは、街でさまざまな看板を目にする

8. 狭い日本 そんなに急いで 何処へ行く

9. 気をつけよう 毎日通る 道だけど

また、電車内や新聞でよく目につく交通標語に次のようなものがある。

10. どびだすな 車は急に 止まらない

11. 飲んだら乗るな 乗るなら飲むな

これら、8~11の例を見てすぐに気がつくことは、すべて七五調だということである。最初にあげた「もしもしかめよ」を見てほしい。これもまた七五調だ。昔ながらの童謡の歌詞のほとんどが七五調である。次にあげる「いろは歌」もそうだが、日常生活を見わたすと七五調が定着していることがわかる。

12. 色は匂へど / 散りぬるを

我が世誰ぞ / 常ならむ

有為の奥山 / 今日越えて

浅き夢見し / 酔ひもせず

この七五調というものは、「古事記」の時代から登場している。それ以後、千何百年もの時がたった今なお、七五調は絶える気配を見せない。童謡・俳句だけでなく、現在の歌謡界にも多く見られる。例えば、次の例を見てほしい。

13. あてもなく / 立ち止まり / ふり向いたのは

大人びた君の / 後姿

忘れない / 何もかも / 青春の日を

帰らない日々が / かけぬけていく

(松山千春「卒業」)

七五調の口ずさみやすさ — そこには、何か秘められたリズムがあるのではなからうか。次に、その研究結果を述べたい。

われわれ日本人は、どの音節にも同じ時間をかけて発音する。つまり、「ア」も「イ」も「ウ」も同じ長さで読むわけである。あたりまえのように思うが、英語ではぜんぜんそんなことはない。「a」と「she」——どちらも1音節だが、同じ長さで発音されることはない。

14. 久方の 光のどけき 春の日に しず心なく 花の散るらむ

紀友則のこの有名な歌を例にとって考えると。たんに音数だけを取ると五七五七七である。先に述べたように、1音を同じ長さで読むのだから、五音句と七音句の時間の比は五対七になるはずだ。が、われわれは短歌を読むとき、各句にはほぼ同じ時間をかけているのだ。(桂広介「日本美の心理」参照)この食い違いは、何なのだろうか。それを解決するには、音読してみれば良い。31文字を一気にだらだらと読む人はいないはずだ。区切りをつけ、休止を入れながら読んでいる。各句が等しい時間になるように間を入れて書き出してみると、

15. ヒサカタノ。。。

ヒカリノドケキ

ハルノヒニ。。。

シズココロナク。

ハナノ。チルラム

となる。「。」1つを音節1つぶんの「間」だとみれば、結局どの句も八字ぶんの長さをもってしていると推定される。これを音符を使って記録してみる。

16.

見てのとおり、四拍子になる。参考のために、もう二つ有名な歌を音符で示しておく。

17.

18.

五七五七七という数自体には何のリズムもない。しかし、七五調には口ずさみやすい、日本人に合った美しいリズムが確かにある。それは音楽の四拍子と言えるのではないか。

しかし、ここにまだひとつ問題点がある。なぜ一音に八分音符をあて、二音をもって四拍子の一拍をつくるのか、ということである。1音に四分音符をあてれば、四拍子ではないと言われる人がいるかもしれない。なぜ、二音節が一単位になるのか。

まず、身近なものの名前を思い浮かべてほしい。「山」「川」「土」「春」「父」「人」「家」など、基礎的な名詞はたいてい二音節である。二音節の単語は日本語の中に数えきれないほどある。また、二音節の語ほど上に挙げたような身近な言葉が多い。これは、二音節が日本語ではいちばん自然な、発音しやすい単位であることを物語っているのではないか。これを裏づける資料があるので示しておく。

19. 古事記上巻の中の単語の音節数による類別

1音節語	2音節語	3音節語	4音節語
9	56	27	7

(熊代信助「日本詩歌の構造とリズム」)

古事記にはまだ漢語その他の外来語があまり混じっていません。和語が多いのであるが、その中における二音節語の優位は明らかであり、この時代から日本語と2音節とは深いかわりがあったと言えよう。

話を二音節一単位のことについて、もどすことにする。その原理のわかりやすい例としては、日本語に非常に多い略語がある。略語の方式は、二音節を二つ重ねることだいたい決まっている。大学卒業は「ダイ・ソツ」、生活協同組合は「セイ・キョウ」、国民体育大会は「コク・タイ」となる。普通の単語で説明すると、「座ぶとん」⇒「ザブ|トン|」、「手袋」⇒「テブ|クロ|」、「歯並び」⇒「ハナ|ラビ|と、発音される。単語を縦線で分けて書いたが、そこで切って読んだりするわけではない。切れるように読む、リズムのとらえ方を縦線で示している。その区切り方は、決して意味のつながりに従ったものではない。「気がい」は「キチ|ガイ|で「キ|チガイ|にはならない。「音キチ」「レコ・キチ」など、いろんな二音節+二音節の合成語がつくられているが、それも「気がい」を「キチ|ガイ|と発音しているひとつの証拠ではないか。日本語は、意味とは関係なく二音節を一単位としている。これで、二音節で四拍子の一拍とすることを少しでも納得していただけたらう。

七五調が四拍子と言われても、ピンとこない人が多いだろう。しかし、私たちの身の周りに四拍子は定着している。まず、日本人のつくる歌は三拍子が極端に少ない。古くから伝わる民謡やわらべ歌は、ほとんどが二拍子ないし、四拍子である。明治以後、西洋音楽が積極的に取り入れられた今でさえ三拍子の歌は少ない。最近の音楽雑誌で調べてみたが日本の歌では、150曲のうち1曲も三拍子の歌がなかった。

拾い出せばまだまだある。応援団が笛や太鼓で行う三三七拍子は、とても調子がよく、「三三七拍子」と聞くとついつい三拍子三拍子七拍子と考えたくなるものだが、そうではない。

20. 

このように、一拍の休みを入れながら笛を鳴らしている。これは四拍子である。また、「お手を拝借……イヨーッ」ではじまる手じめは、数を数えれば三、二、一ということになるが、これも間に休みが入って、

21. 

となり、やはり四拍子である。

大勢で力を合わせるときの掛け声は、「一、二、三」である。しかし、それをそのまま三拍子と受けとってはいけない。われわれは「イチ、ニー、ノー、サン」と「ノー」を入れて四拍子にしている。

数のかぞえ方。一、十、百、千、万、十万、……と、日本では四桁単位であがっていく。もちろん西洋は、算用数字のコンマの打ち方でわかるように、三桁である。

われわれの日常の生活リズムが、圧倒的に四拍子あるいは四を基準とすることは、どうやら否定できそうにない。七五調はこの四拍子から生まれた表現なのである。

これで、日英両語の特色をそれぞれみだが、さらに両語の違いを知るためにこの逆、すなわち日本語で韻を踏むこと、英語で七五調を作ることを考え、それが適切かどうかをまとめることにする。

(3) 日本語での頭脚韻 — 利用されにくいのは何処か —

日本の歌の中で「韻」に気付くことはめったにないし、学校で詩を習ってもあまり出てこない。これは、やはり日本語では踏みにくい踏んでも目立たないからだと考えられる。英語と同じよう、日本語の性質と韻を踏む時の条件を照合してみる。

脚韻の場合 — 5.と同じく文末の品詞について日本語例を挙げてみよう。

例文	文末の語の品詞
私は毎日学校へ行く。	動詞(終止形)
きのう遊びに行った。	動詞(連用形)+助動詞
東へ進め!	動詞(命令形)
あの娘は純情だ。	形容動詞
さざんかの花は白い。	形容詞
立て、その足で。	助詞

文末に名詞・代名詞がないのが英語と大きく違うところであり、そのため、文末に持つてくることのできる語数は極端に少なくなる。全語彙の中のわずか一部に限られてしまう。その上、助詞・助動詞は1音節・2音節と短く、単独では意味を持たないので文末が「……行った。……見た。」となっても読む側に強い印象を与えることができない。これだけのハンディの中で脚韻を踏もうと言葉探しをしても無理が出るだけなのは明らかである。

頭韻はどうか—。頭韻なら語彙制限はない。すべての語が頭韻を踏む要素となり得る。では音節面に問題はないか。ここで6.と7.を見返してほしい。6より7の方が韻の印象が強いはずである。これは、子音より母音の方が響きが強いためである。さらに母音よりも子音+母音、そ



して長母音、二重母音・はんでん母音([ər]), 最強が二重母音+はんでん母音([eər]), ([oər])  
 など)である。これらの音と日本語の音を比べてみる。子音は日本語では[n]だけが母音と  
 合わせて使うので一応あることにする。長母音もよく使う。(がっこう[gakko:], おかあさん  
 [okaa:sa:n])など二重母音は多くみて20種類しかない。母音が5音しかないからである。はんで  
 ん母音は全くない。英語では母音は約12種類、ゆえに二重母音は数学的にみて132種類とい  
 ことになる。このことから分かることは、日本語には頭韻の要素として最も強く耳に働きかけ  
 る音が欠けているということであり、6.のタイプの韻は踏めても7.のタイプは不可能なのであ  
 る。6.タイプの例として芭蕉の一句を挙げておく。

23. しずかさや 岩にしみ入る せみの声

頭韻にも、音節の面で脚頭と同じようハンディキャップがあり、踏みにくいのである。

#### (4) 七五調英語は存在するか

日本語と英語は根本的に性格が違うから詩のつくり方も違う。日本語は、ほぼ等時性をもつ  
 音の数でリズムを構成した。その結果が四拍子である。英語はそういうわけにはいかない。ア  
 クセントの強弱やシラブル(音節。例えば「be·gin」では中点のところまで二音節に分かれている。  
 発音上区切るとしたらそこで切れるというしるし — つまり、音節を分けるしるしが「·」であ  
 る。)の長短があるからだ。英語の、アクセントの強弱でつくるリズム形成はいろいろある。

24. Pússý căt pússý căt whére haŕe yóu béen?

25. Óld Mcdónald hād ā fárm, Ê-Ï-Ê-Ï-Ô. (マザーグースの歌)

24.の形式は、「強弱弱、強弱弱……」と続くものである。25.は「強弱、強弱……」といった形式だ。  
 一般論として、英語は話し言葉が25.の形式になることが比較的多く、「強弱」型が英詩のもっとも  
 自然な形だといわれている。強いアクセントの音節は、一般的に長めに発音されやすいので、  
 音節の長と短が交互にあらわれる型ということになる。(別宮貞徳「日本語のリズム」参照)

26. To be or not to be, that is the question.

(生か死か、それが問題だ。)

例えば、シェークスピアの有名な26.のせりふについて考えると、次のように読まれやすい。

27. 

つまり、三拍子になるわけだ。英語は「強弱」型になりやすく、「強弱」型は三拍子になりやすい。  
 この三拍子理論を裏づける強力な証拠がある。英米人の発音する日本語を思い浮かべてほしい。  
 例えば、われわれの発音では|ヨコ|ハマ|、|カマ|クラ|となるのが、英米人の発音では|ヨコ|  
 ハー|マ|、|カマ|クー|ラ|と、三拍子化してしまう。

音符で示すと、

28. 

となる。彼らは、習慣的にどこかに強いアクセントを置いてしまい、そこが自然に長く発音さ  
 れるからそうなるのであろう。

さて、本題の「七五英語は存在するか。」ということだが、どうであろうか。五七五七七は表  
 面上の字数にすぎず、本質は四拍子だった。従って、七五の音節で英詩を作っても上に述べた  
 ように三拍子になりやすいので、本来の意味は全くないのである。かりに四拍子の英詩ができ  
 ても、それが美しく自然でなければ価値がない。— よって結論は、七五調は日本独特のリズム  
 であり、七五英語は成り立たない。と、いうことである。

### III おわりに

日本語と英語は根本的に異なる。どちらも言語でありながらそれぞれ違った特徴があり、そ  
 れらを逆に利用することはできない。それは、生まれも育ちも違い、完成される過程ではほとん  
 ど接触しなかった二カ国語において必然的なことである。今、日本語にロック・エレベーター・  
 ペンなど多くの英語が導入され、同時に英語にも kimonoや、tempura などの語が次々と入り  
 込み、しだいに両国語が混じり合っている時代である。こういった意味では、今の日本  
 人にとって随分英語は勉強しやすくなった。そうかと言って、適当に混ぜ合わせて覚え、ただ  
 単に物事の伝達機能とするだけでは何千年と続いてきた言葉の歴史を無意味なものにしてしま  
 うだけである。互いに相手を見ながる要素とならなければいけないはずである。特に母国語であ  
 る日本語は、ふだんは空気のようなものであるが、英語その他外来語を利用して、一度じっくり深呼  
 吸をするように見直し、よい意味での「孤立語」としての性質を維持しなければならない。また  
 外国語は、自分の持ち合わせている日本語をもとにして、比較しながら習っていけばいいのだ  
 と思う。このようなことから、今後も引き続き色々な事を調べていきたい。語源や派生の仕方  
 の違いも面白いだろう。

空気を無くして生きられないように、私達は言葉無しでは共同生活ができない。生活の源で  
 ある言葉をもっと大切にしていきたいし、深く知りたいと思った。

#### ★ 参考文献

- 井上ひさし 「私家版 日本語文法」 新潮社 1981  
 別宮貞徳 「日本語のリズム」 講談社現代新書 1952